論文 1

バターン半島総攻撃における文化工作Ⅱ ——上田廣「地熱」・柴田賢次郎「樹海」を中心に

松本和也

1. はじめに——宣伝班員文学者による戦記

昭和 16 年末、太平洋戦争開戦に先立ち、多くの文化人が白紙徴用の後、南方各地に派遣され、軍宣伝班員として活動していった[1]。このプロジェクトの来歴・概要については、中野聡に次のまとめがある。

> 組織としての軍宣伝班が、文化人やメディア専門家を徴用員として動員して初めて編成されたのは、一九四一年十一月の南方派遣軍編成においてであるが、その前身・母体として、陸軍省報道部——一九一九年（大正八年）新聞班として設置、三八年（昭和十三年）情報部に昇格、四〇年報道部と改称（大本営陸軍部報道部と同一組織）——をあげることができる。南方派遣各軍の宣伝班を統括したのも報道部であった。また文化人の従軍という点では、日中戦争に文筆家が従軍した「ペン部隊」の例（一九三八年）がある。しかし、日中戦争当時の報道部はあくまで新聞等の報道管理を主たる任務とし、「ペン部隊」も対国内宣伝を目的としていた。もちろん軍宣伝班も対国内宣伝、報道の任務を負ったが、何と言っても従来の報道部とは異なる軍宣伝班の特色は、対敵地・占領地の民衆工作に重点をおいていた点にあった。[2]

この時に徴用を受けてフィリピンに派遣された尾崎士郎は、戦後、「日本の P・K 部隊（一）」（『改造』昭 28・5）を発表し、自身の経験に即してこのプロジェクトを次のように紹介している。

> 宣伝部隊は、その頃、ドイツに出来た P・K 部隊を模倣してつくられたもので、参謀本部の第八課（謀略班）が、民間の能力を動員して一つの形式を強引に築きあげたものである。これも後になつてわかつたことであるが、急速に計画し、急速に実行に移した第八課の意図は、この一隊を各地の占領区域に上陸部隊とならんで派遣し、政治、文化の基礎をかためるというところになつたらしい。これに所属する要員は、民間人のほかに班長として現役の中佐一名、中尉、少尉五名、下士官十名、兵百名で、第八課の企画によると、P・K 部隊は、ドイツ流にいうと「戦う宣伝中隊」であるから、現地の軍隊の内部に位置を占める必要がある。民間人には軍隊の経験が乏しいからというので中尉、少尉は軍司令部、参謀部に対する連絡の任を帯び、下士官は兵の指揮にあたり、兵百名のうち五十名は当番任務を担当するという仕組になつていた。／その命令が、最初から軍隊の内部に徹底しなかつたのは、この部隊の出発が極秘のうちに行われたということと、これをうけとつた軍隊が、このような民間部隊の操縦方法を誤認したところにある。（217～218 頁）

後段の記述については、本稿 **3** でも検討するが、（日中戦争期に比して大規模に[3]）このようなかたちで文学者が動員されたのは、いうまでもなく、大東亜共栄圏構想を擁した太平洋戦争を遂行するためであった。《大東亜共栄圏の確立によつて吾国が政治的推進力となり、経済的指導性を持つ事は云ふまでもないが、更に文化的な中心指導力となる事は何にも増して必要な事であり、之によつてこそ始めて共栄圏が共栄圏たるの責を示す事が出来るであらう》（80 頁）という考えを示す山田文雄は、「南方に対する文化政策」（『日本評論』昭 17・3）において、文化工作の必要性を次のように論じていた。

文化の問題は各国民族の歴史と伝統との上に根強く築かれた問題である〔。〕之を外部から皮相な見解を以て独善的に処理すべきではない。而も民族の中に根強く築かれてゐるだけに、之を深甚な思想と慎重なる態度とを以て、巧妙に取り扱ふならば、その効果も大であり、各民族の心を突いて揺り動かす力となるであらう。各民族は夫夫自己の持つ文化に対しては独自の誇を持つものである。その誇を尊重しつゝ、より高き文化にまで高めて行く事こそ吾国に課せられた光栄ある使命である。(82〜83 頁)

さらに山田は、《吾国》がもつ《極めて高度は(ママ)文化》を以て《大東亜の諸民族を率ゐ、より高き大東亜の文化を建設する事が一つの大きな使命である事を、国民凡てが銘記せねばならぬ》(83 頁)と言明して、大東亜文化建設のために文化工作への貢献を、国民の《大きな使命》だと位置づけてみせた[4]。このような《使命》を実践的・組織的に展開したのが、陸海軍による文化人の南方徴用であった。

本稿ではこうした南方徴用作家の活動[5]のうち、フィリピンに派遣された文学者による文化工作に注目する。なお、フィリピンには尾崎士郎、石坂洋次郎、火野葦平、上田廣、柴田賢次郎、今日出海、三木清、沢村勉、寺下辰夫、生江健次、山上伊太郎、安田貞雄らが派遣された。さらにいえば、太平洋戦争において日本が《戦略的攻勢期》[6]にあった時期のバターン半島総攻撃では、火野葦平、上田廣、柴田賢次郎が宣伝班員として従軍しつつ、戦場の実景や対敵宣伝の様相、捕虜となった比島兵/米兵に対する認識などをモチーフとした戦記を書き、それらは内地の読者へと届けられた。

バターン半島総攻撃をモチーフとした戦記として鳴り物入りで発表された、火野葦平「兵隊の地図」(『時局雑誌』昭 17・6)には、末尾に次の「後記」が付されていた。

(後記。バタアン半島総攻撃従軍のために、三つの報道部隊が編成され、それぞれの部隊につけられた。西海岸部隊には上田廣君のゐる切東隊、中央部隊には柴田賢次郎君のゐる大塚隊、それに私の渡邊隊。そこで私たちがおのおの自分の従軍した部隊のことだけを書いておけば、三人の書いたものを読み合はせることによつて、いくらか、バタアンの戦場といふものが丸味を帯びて来ることになるだらうと話しあつた。そこで、叮嚀な読者が居られたら、上田君の「地熱」と、柴田君の「樹海」とをいつしよに読んで下さるとありがたいのである。(155 頁)

同文は、単行本『兵隊の地図』(改造社、昭 17)にも掲載された。また、上田廣「地熱(一)――或る報道班員の手記――」(『文芸春秋』昭 17・6)冒頭に付された比島派遣軍報道班長・勝屋中佐「「地熱」の序に寄せて」にも、次の論及がみられる(同文も『地熱』〔文芸春秋社、昭 17〕に収録される)。

〔「地熱」の〕本篇は総攻撃前夜までの彼〔上田廣〕の記録であり続篇は血湧き肉躍る総攻撃の経過中に於ける彼の体験を描写したもので偉大にして厳粛なバタアン戦の一断面であるが、他の小隊に参加した火野葦平、柴田賢次郎両君の戦記も矢張り江湖に見えることであらうから、之と併せ読まれたならばバタアン作戦の世紀的偉容を立体的に把握せられるのではないかと思ひ一言附け加へて置く。(170〜171 頁)

もちろん、柴田賢次郎『樹海』(櫻井書店、昭 18)においても、「後記」に次の論及がみられる。

フイリツピン作戦といへば、バタアン、コレヒドール作戦であつたといつても過言ではない。私は幸運にもバタアン総攻撃部隊の中央部隊に従軍を命ぜられて、右翼部隊に従つた上田廣君、左翼部隊に従つた火野葦平君と共に、最初から終ひまで従軍した。/いろ〳〵書かねばならないことは充分にあつたが、作戦の都合上発表を許されないことが沢山あり、思ふ存分に書けなかつたことは残念であつた。しかし総攻撃の姿は描き出したつもりである。バタアン、コレヒドール作戦の姿は、

先に発表した上田廣君の「地熱」と火野葦平君の「兵隊の地図」と合せ読んで頂けば、はつきり分つて頂けると思ふ。（214〜215 頁）

総じて、バターン半島総攻撃に際しては、別部隊で従軍した三人の作家が『兵隊の地図』、『地熱』、『樹海』といった戦記を揃って発表しており、さらにそれらは相互参照されることを前提に書かれ、したがって、三作品をあわせよむことでバターン半島総攻撃の全貌に肉薄するよう予め仕組まれてもいた。

そうした企図に対する同時代の理想的な応答として、岩上順一「十七年文壇回顧」（『新文化』昭 17・12）があり、同論には《バタアン半島に従軍した火野葦平の『兵隊の地図』と上田廣の『地熱』柴田賢次郎の『樹海』は宣伝班員として、活動した彼等の従軍記として熱烈な印象的な筆致が、記憶に残つてゐる》（17 頁）といった肯定的評価を伴う論及がみられた。してみれば、上記三作は個々の作家による作品であると同時に、バターン半島総攻撃を立体的－多角的に捉えるための連作であったともいえ、実際、書かれるモチーフ－論点にも共通点が目立つ。ここに宣伝班員として戦記を書く文学者の役回りがあったともいえるが、それでも、書き手が異なる以上、表現までが完全に重なるということはなく、そうした局面に文学者個々人の戦争観やフィリピン（人）、アメリカ（人）に対する感情が垣間見えもする。

そこで本稿では、上記三作品を中心的検討対象として、適宜、関連作品も参照することによって、バターン半島総攻撃に際して、何が書かれ、それらがどのような意義をもったのか、考察していきたい。

2–1：火野葦平「東岸部隊」

フィリピン戦に関しては、日本軍がバターンとコレヒドールを攻略した後に、比島派遣軍報道部編『比島戦記』（文芸春秋社、昭 18）が上梓された。以下、目次を列挙しておく。「第一部　作戦篇」には、尾崎士郎「概況」につづき、マニラ攻略戦として池田禎治「征途第一歩」、木下次郎「マニラ・ロード」、バタアン半島ナチブ攻略戦として土子猛「左翼攻略戦」、伊藤正次「右翼攻略戦」、バタアン半島総攻撃として火野葦平「東岸部隊」、柴田賢次郎「山間部隊」、上田廣「西岸部隊」、コレヒドール攻略戦として澤村勉「コレヒドール要塞」、ビサヤ地方攻略戦として上島長健「セブ入城第一日」、山本良雄「パナイ島敵前上陸」、安田貞雄「ミンダナオ戡定」、曾根勇三郎「ネグロス島上陸記」が並ぶ。「第二部　戦塵抄」は三木清「飛行場の埃」、石田秀三郎「断崖を征く部隊」、石坂洋次郎「一月十三日」、菅原俊二「総攻撃準備期」、鮫島國輝「陸兵の制海権」、寺下辰夫「比島遠征詩抄」、皆川修道「戦後寸感」、尾高晃「歴史の録音」、今日出海「空の総攻撃」というラインナップである。末尾には、勝屋中佐「跋」が付された。

同書巻頭には、和知鷹二「序」が配され、そこには次のような戦争の意味づけがみられる。

今や、比島戡定作戦は終熄を告げた。比島は、三世紀以上にわたる西班牙支配の後に引続き四十五年の米国統治に屈服し、最近に於ては、米国の東洋侵略の拠点として、其の露骨にして狡獪なる資本主義の金城湯池であつた。かくて、東洋民族たる比島人は其の個有の性格を喪失し、民族の矜恃を忘却して、東洋の海は汚濁されんとしつつあつた。この危機を救ふ為壮偉なる皇師の遠征は決行されたのである。（頁表記なし）

こうして、西班牙－米国による《東洋侵略》を戡定作戦によって阻んだ帝国日本が、「東洋民族たる比島人」とともに歩んでいくために編まれたのが、フィリピン戦の総括である『比島戦記』だった。

フィリピン戦、バターン半島総攻撃に参加した火野葦平は、その体験に即して「兵隊の地図」（『時局雑誌』昭 17・6）を発表した。同作には、投降した比島兵と協力した対敵宣伝戦の様相のほか、「私」による比島兵／米兵に対する生々しい感情が書かれていた[7]。同様の内容は、後に発見された従軍手帖にも記載があり、両者の比較検討はすでに別稿で試みた[8]が、火野葦平「東岸部隊」（『比島戦記』前掲）にも両者と重なる記述がみられる。「兵隊の地図」「四月六日」と重なる、次の一節から検討していく。

私はたびたび支那の戦場で、支那兵の捕虜を見て来たが、そのたびにある困惑した気持をおさへることができなかつた。同じ皮膚の色をし、同じ顔立ちをした敵兵といふものは、少なからずわれわれを当惑させる。それは比島兵の場合にも同じであつた。そのときの米兵の捕虜はいづれも兵卒で、背のたかい一人が下士官であつたが、突撃をした日本の兵隊が銃剣をつきつけると、たちまち両手をあげて降参したのである。投降さへすれば生命だけは安全だといふ虫のよい考へかたである。これが、いはれのない侮蔑をわれわれの国に加へ、祖国の存立をさへ無視しようとした傲慢な国の国民なのだ。私は日本民族としての矜恃に胸がふくれあがる。トマトのやうに赤茶けた彼らの顔を見て、私はきはめて不潔なものを見たやうな思ひになる。私たちが日本民族としての怒りをいかに高邁な使命にまで高めつつあるかといふことを、このやうな時ほどはつきりと感じることはない。（96～97 頁）

日中戦争からつづく日本兵の働きにふれつつ、同じ東洋人である支那兵（捕虜）を「敵」と認識することへの抵抗と逡巡を抱いてきた「私」が、太平洋戦争では比島兵に対して同様に「当惑」を覚えている。そうしたこれまでの「敵」と対照的に、米兵に対して「私」は、その行動から容姿まで、ためらいなく批判－否定の言を重ねていく。こうした、火野が従軍手帖、「兵隊の地図」、そして上記「東岸部隊」といったジャンルをまたいで反復していった米兵批判については、石﨑等に次の指摘がある。

フィリピン戦線の戦記・戦話・従軍記を読んでいくと、アメリカ軍がフィリピン兵を前線に配置し、自分らは後方で指揮を執ったことから、日本兵の多くは苛立ち、見えない敵への怒りをあらわにした記述が目につく。敵でありながら、同じアジア人としてフィリピン人に同情し、卑劣なヤンキーの戦略に強い嫌悪感を抱いたわけだ。[9]

もちろん、こうした日本兵の比島兵／米兵に対する反応は、大東亜戦争のイデオロギーとも重なる。その意味で、戦場の兵士による生理的な感覚を通じた同胞意識／嫌悪感が書かれた文学者による文章は、それが内地で読まれれば、そのことによって自動的に文化工作としての意義を担うことにもなる。さらに、上の引用箇所で注目されるのは、米兵－米国批判を通じて、「私－私たち」に「日本民族」の「高邁な使命」が再認識され、ナショナル・アイデンティティーが増幅していく点である。これもまた、日本兵への共感を通じて、内地の国民（読者）へとイデオロギーを伝達する積極的な文化工作といえる。

バターン半島総攻撃は 4 月 9 日に米軍が降伏したことで決着をみるが、その後、それまでほとんど目にすることのなかった米兵が大量に投降し、その後の様相は「東岸部隊」では次のように書かれる。

日本の兵隊が二百も三百の米兵をあづかる。中には、一人で五百人も米兵を引率してゆく。日本の兵隊は米兵の肩までしかない。おまけに軍服はよごれてぼろぼろになつてゐる。これは漫画ではないのだ。その日本の兵隊の指揮をうけて、米兵は卑屈さうに愛嬌などをふりまきながら、ぼくぼくと重い足どりで埃の道をゆく。あるところでは、多くの米兵が膝をいだいて炎天のなかに屯してゐる。私はこの眺めを見て、今さらのやうに日本の兵隊の立派さが考へられた。カポツト台ではじめて三人の米兵を見たときのことが思ひだされた。ここにだらしなく屯してゐる外国兵たちは、嘗て無法なる侮辱をわれわれの祖国に加へようとした傲岸な国の国民なのだ。私はおびただしい投降兵の群をながめて、不純な成りたちによつて国を形成し、民族の矜恃を喪失した国家の下水道から流れ落ちて来る汚水を見てゐるやうな感じを受けた。このやうなときほど、日本の兵隊が美しく、且つ、日本人たることを誇らかに感ずることはない。（106 頁）

先の引用箇所の変奏を伴った反復である上記引用箇所では、体軀は小さく軍服は汚れていようが、米兵に勝った日本兵を称えた上で、改めて米兵－米国を「不純」、「汚水」といった修辞を通じて徹底的に批判し、その返照として日本兵の「美し」さ、日本人としての「誇」りを高らかに謳いあげていく。

このように繰り返し、バターン半島総攻撃に関わって日本兵／比島兵／米兵を序列化しながら書いた火野は、その後もフィリピンでの体験をモチーフに作品を書きついでいった。そのうちの1つである『バタアン戦話集　敵将軍』（第一書房、昭18）に付した「まへがき」に、火野は次のように書いた。

> 戦争のすがたが支那事変と大東亜戦争とそんなにちがつてゐるわけもないし、根本的にはひとつでなければならないけれども、やはり、種々の面に私たちはことなつた印象をうける。それを私たちは規模の拡大されたかたちとして受けとる。また、いままではかくされてゐた面が表面にうかびでて来たかたちとしても理解する。と同時に、私たち文学者がそのなかにはいつて捕へなければならぬ問題も、あらたなひとつの情熱をわきたたせることが少くない。たとへば、歴史の問題、民族の問題、さうして、それらのうへに立つ人間の問題、生死の問題。広大な海と空と山と町とに展開される切実な歴史の進行のながれのなかで、これを静かに観察し描くことは、もとより容易ではないけれども、ここに文学が主題をもとめてゆくことになれば、文学が新たな発展をし、また、祖国へ奉仕する方向も、おのづから決定されるのではないかと私は考へてゐる。（1〜2頁）

中国戦線から比島戦線へと、変わらぬ戦場の様相を兵隊によりそう立場から書きついできた火野が、ここでは両者の差異を強調している。中でも、太平洋戦争下において文学（者）が果たすべき使命－役割[10]について、《祖国へ奉仕》という観点から改めて思索した火野は、そこにこそ文学の《主題》があるのだと見通していた。別言すれば、太平洋戦開戦後という新たな局面において、それに応じて認識論的に「新たな発展」を遂げたはずの文学（者）による実践－成果が模索されていくことになったのだ。

2–2：上田廣「地熱」

上田廣「バタアン戦記　地熱」（『文芸春秋』昭17·6〜8／『地熱』文芸春秋社、昭17［図1］）は、掲載誌の「編輯後記」において、《本号締切間際に宣伝班員上田廣氏のバタアン半島戦記「地熱」を得た》（昭17・6、208頁）、《激烈を極めたバタン（ママ）半島の戦況を眼前に見る様である》（昭17・7、208頁）と紹介されたように、バターン半島攻略戦をモチーフとして、速報性と事実性が強調された戦記である。

また、冒頭には、次に引く比島派遣軍報道班長・勝屋中佐「「地熱」の序に寄せて」が掲げられていた。

図1：上田廣『地熱』　本体とカバー

> 熱帯特有の「マラリヤ」やデング熱に冒される者も少くない中にあつて、上田君は本文にある如く或は兵隊達と一緒に「ニツパハウス」に起居し或は砲煙弾雨の最前線に出かけて伝単投降票をくくりつけた風船を飛ばし、その特異の才幹と頑健な肉体逞ましき精神力を以て我が班のために終始良く働いてくれた。（6月：170頁／引用は初出による、以下同）

さらに勝屋は《この地味な日記体の記録の中に地を這ふ皇軍の底力と天翔ける大東亜戦争の理想とが看取出来るので、自分は広く江湖に敢て薦めたい》（171頁）と同文をしめくくることで、同書を意味づけていく。ほかにパラテクストとしては、次に引く、単行本に付された上田廣「後記」がある。

> コレヒドール島の攻略に参加するため、半ばで筆を擱いた私が、いまこの稿を終りふと思ひあた

つたのは、ときとして戦場にあるものの誰もがいだく、まだ生きてゐる、と云ふ感慨でありました。それはわれわれの皇軍が獲得した偉大なる戦果のかげに、多くの戦没将兵、負傷者があると云ふこと、それに通ずる感慨であるのです。それとこれとから、更に私はひとつ鞭を感じ、ひとつの勇気をあたへられたと思ふのですが、今後の仕事の出発点が、同じところになければならないのは云ふまでもありません。／「地熱」は、作品として甚だ不十分のやうですが、何等かの意義も存するであらうと思ひ、発表することにしました。（209 頁）

東野村章は「戦記と文学――従軍作家論――」（『文学建設』昭 18・3）において、上にいう《何等かの意義》に《重点を置くべき》だとし、さらに前段の《感慨》にふれ、次のように論じている。

その感慨が、かうした場合におけるありきたりの感慨でなく、ぢつと凝めてゐたものから自然に滲み出るある澄みきつたものを感じるのである。／それは「地熱」の中を流れてゐる作者の眼が浮かびあがつてゐるからだと思ふ。これは一篇の報告でもあらう。が、その中に作家としての心の眼があつた。戦ふ兵士らの上に、人間としての慈眼が被さつてゐるのだ。

これは、戦場をモチーフとしながらも、単なる現地報告にとどまらない文学性が看取できたという、「地熱」に対するきわめて高い評価といってよく、実際に東野村は《「兵隊の地図」よりはすぐれたものを感じた》（22 頁）とも評していた。また、もう一つの同時代評、逸見廣「『地熱』について」（『早稲田文学』昭 18・5）においては、まず「地熱」の概要が次のように紹介される。

戦線に於ける上田氏の任務は、原住民の宣撫工作のほかに、投降票をくゝりつけた特殊風船を放流させたり、投降勧告のラヂオ放送をしたりする事にあたつて、そのためには夜間ひそかに敵前百五十メートルの地点に迫り或ひは敵の集中砲火を受けた事などもあるが、描かれてゐるものは飽までさういふ特殊任務に携つた自己の経験と戦場の雰囲気についてゞあつて、いはゆる銃をとり剣をとつて戦ふ戦争のまつたゞ中に於けるそれではない。先にバタアン攻略戦の一断面を描いた作品と言つたのはその意味に於てゞあるが、それだけまたこの作品は戦記文学として特殊な面も持つてゐる。（20 頁）

上にいう《特殊な面》とは、逸見によれば《激しい戦場と必死な気持の中に、一点ポカンと白紙のやうに取り残されてゐる放心的なゆとりとか美しさ》（20 頁）であり、ほかに《バタアンの地勢や作物についても丹念な観察を怠つてゐない》点も肯定的に評価された。さらには、「兵隊の地図」でも問題化された、日本兵／比島兵／米国兵に関して、《原住民や投降したフイリツピン兵達を通じて、その国民性の一斑が具体的に描き出され、日米両国に対する民族心理が、バタアン戦後には著るしく変化した事も、あの夥しい捕虜の有様を如実に描く事によつて自づから表はされてゐる》、《作者は何らはつきりした意志も判断も持たずに戦争に駆り立てられ、徒らに米兵の盾となつたフイリツピン兵には時にその無自覚極まる進退に対しては阿然たるものを感じながら、慨して憐憫の情を注いでゐる》、《憎しみは専ら米兵に注がれてゐる》（21 頁）と評され、フィリピン戦だけでなく大東亜戦争－大東亜共栄圏をも正当化する、米国を敵と位置づけつつ東洋を指導していく日本の立場が内地に伝わったことも確認できる。

以下、同時代受容をふまえつつ、「地熱――或る報道班員の手記――」本文を検討していく。

日記形式の「地熱」だが、冒頭の「三月十二日。」には次の一節がある。

メカウヤンの町端れあたりから、フイリツピン人を満載したカロマタが見られる。老人も乗つてゐれば若い娘も乗つてゐる。山中にでも難を避けてゐたものが、そろそろ帰農し始めたのにちがひなく、駁者の多くはわざとらしく笑ひ、それが笑ひ顔にならないで、ひきつれ、泣顔のやうに眺められるのが多かつた。おどろいたことにはその顔がときとして日本人に見え、友人の誰かに似てゐる

やうにさへ思へるのである。私たちはいちいち手を挙げて答礼した。こんなにフイリツピン人がゐるのに、アメリカ人はどうしたのでせう、と不意に私のかたはらの兵隊が云ふ。私はぎくんとした。わかりきつたことながら、アメリカを敵として上陸した私の眼に、まだいちどもその国人が映つてゐないことから、思はざる感慨に襲はれたのだ。（6 月：171 頁）

比島人の動向を書くうちに比島人と日本人との近似性を語り、返す刀で「敵」でありながら姿をみせない米兵への敵意がはやくも伏流している。直後には、「曾ての支那事変に参加した私が、山海関に上陸して初めに見たのが支那人であつたのを思ふと、それとこれとのちがひのなかに、今度の戦線の特殊性があるやうに思へてくるのであつた」（6 月：171 頁）という一文がつづき、この戦争が日中戦争の延長線上にあるものではなく、特別な意味を担うものであることが言明される。

比島兵俘虜への「取調」の場面では、次のように比島兵にアメリカのことを問いただしていく。

本部の将校はちよつと投降票に見入つたが、アメリカの将校はこれを持つてゐる兵隊を罰すると云ふが本当か、と質問した。二人の俘虜は同時にうなづいた。それをお前たちはどこにかくしてゐたかとたづねると、たたんで銃口蓋の中へしまつて置いたと云ふ。つづいて訊問者は、前線にあるフイリツピン兵が、後方にあるアメリカ兵にどんな感情をいだいてゐるか、と詰寄つたが、それには二人とも答へなかつた。日本とアメリカと何れがつよいと思ふかと云ふ問にたいしても同じであつた。給与、衛生状態だけは、人間扱ひではないと答へた。そして自分たちは、これからは日本軍のためにつくすから、よろしくたのむと哀願するのである。（「三月二十二日。」、6 月：190 頁）

対敵宣伝の効果として投降兵の存在が書かれつつも、日本軍に投降してもなお比島兵俘虜がアメリカに対して遠慮、信頼、恐れなどを抱き、敵意を向けるまでには至っていない実情が確認できる。上につづく、「フイリツピン中尉の俘虜」に「宣伝の効果」についての質問を発した場面を次に引く。

日本軍の伝単を読んでゐるかどうか、兵隊たちが拾ふと厳罰に処してゐると云ふが事実かどうか、読んだ兵隊はどのやうな影響を受けてゐるか、等等であつた。返事は否定的であつた。自分達も読むことは読み、兵隊達にも読ませてゐる。それを取りあげるとか、そのものを罰するとか、そのやうなことは絶対にない。然し読ませた後で訓示を与へる。従つて伝単の効果など絶対にないと云ふのである。それでも兵隊の俘虜の全部が全部とも、投降票を持つてゐるではないか、と迫ると、相手は言下に答へた。兵隊たちは珍しがつて記念に持つてるに過ぎない。（6 月：190 頁）

「地熱」を読み進めていくと、フィリピンにおける日本軍の伝単の効果が限定的なものであることが比島兵によって証言されていくが、五日後の「三月二十七日。」には、次の記述が見られる。

部隊本部の呼出しがあつて行き、昨夜五十人の投降兵があり、なほつづいて同じ徴があると云ふことをきく。〔略〕私たちの伝単は、多くフイリツピンの兵隊に向けられて書かれ、実際に前面に銃を握つてゐるのもフイリツピンの兵隊であるのも知つてゐる。然し私はそのままで済まされない気持であつた。その五十人の中にひとつでもよい、白い顔があつて欲しかつた。私たちはアメリカ人と戦つてゐるのだ。さう思ふと私の焦慮はよけい激しくなつてくるのであつた。（7 月：154 頁）

こうして、対敵宣伝－伝単の効果は、実際の投降兵（数）によって日本軍に伝わると同時に、比島兵の背後に存在するはずのアメリカ人が相変わらず姿を現さないことへの苛立ちも強調されていく。

ならば、そのような効果をもたらした対敵宣伝とは、どのようなものかといえば、「兵隊の地図」同様、投降した比島兵を利用した宣伝放送である。その具体的な様相は、次のように書かれていく。

二時間もかかつてタンガレツトとアブラハムの原稿が出来あがつた。こまごまと二枚の紙に書かれた相当に長いものである。読んでみると、タンガレツトの文章にはさすがに相手に話しかけるやうなたくみさがあり、字も綺麗で中学出の名を恥かしめなかつたが、可成りの誇張が感じられた。自分はいま、日本軍の中でたのしくはたらいてゐるが、三度の食事が二度になり、二度が一度となつて、しまひには、それすらもあてにならなくなつた何日か前までのことが、夢のやうに考へだされる、と云ふのはまあいいとして、毎日ダンスもやれば歌もうたへ、ふかふかした寝台にねることも出来る、にいたつては微笑を禁じ得ない。〔略〕長文なのに、アメリカ兵には一ト言も触れてゐないので、どうしてなのかと詰問すると、それは云はん方がいい、と変に頬をすぼめた。簡単にアメリカ兵の悪口を云ふと、かへつて反感を持つものがあるから、と云ふのである。（7 月：157 頁）

ここには、タンガレツトの好意的な協力の様子とあわせて、比島兵に対する米兵の影響力の大きさも、当事者の声を通じて書きとめられている。一方、アブラハムの原稿は、「日本軍に投降することは餓死からのがれることである。自分はみんなが一日もはやく、武器を捨てて投降するのを待つてゐる」といった「実感的な言葉」（7 月：158 頁）が並ぶものであった。

この二人が協力した宣伝放送の様相は、「三月三十一日。」において次のように書かれる。

放送は静かな音楽から始まつた。しみじみとした韻律である。それは溶け込むやうに、大気の中へひろがり、流れて行つた。〔略〕タンガレツトの声がきこえてきた。それは思つたより壮重で、一句づつゆつくりなされ、原稿通りだが読んでゐるやうな調子でなく、私たちにも親しみ深くききとれた。原稿で見たとき、どうかと思つた誇張も、不思議に真実感を伴ひ、かへつてよいやうにさへ思はれた。文章の場合とちがふ、声の持つ魔力が、はたらいてゐるのにちがひない。最後の言葉が終つたときには、私の眼瞼もうるんで、思はず拍手するところであつた。然しアブラハムの語調は熱情的で、初めから私たちを興奮させた。それは実感的な原稿が、非常に役立つたと云ふべきである。ときとしてあせるあまり、ききとれないまでに吃つてしまふこともあつたが、それがまた別の迫力となつて胸に訴へないでもない。（7 月：161～162 頁）

ここには、対敵宣伝－宣伝放送の成功だけでなく、東洋人たる日比両国人の協力による感動を伴う美しい成果が言祝がれている。こうした比島兵の従順さと対置されるのが、米兵である。

バターン半島総攻撃開始後の「四月四日。」には、投降した大量の比島兵があらわれる。

〔投降兵の〕列は、いつ終るとも知れないほどつづいたが、私のさがす顔は容易にあらはれさうにない。私はひとつでもよいから白い顔を見たいと思つた。その顔が、どのやうな表情であらはれようとも、若しあらはれたら、私は持つてゐるだけの声で罵倒し、場合によつては、飛びかかつてやらうとさへ考へてゐた。いや、自分自身が抑へきれないで、刀をふりかざすかも知れない。それでも飽き足らず、……と云つた具合に、私の憎しみの情は、いよいよひとりもゐないことがハツキリしたとき、極点に達した。私は彼等がこの戦線で、フイリツピン兵を先頭にたててゐるやりくちが、東洋の全土に及ぼした醜悪なる手と同じであることを知つた。彼等は、つねに自己の姿をむきだしにすることなく、何者かを傀儡につかひ、如何にも人の好きさうな笑顔をつくつてゐるのだ。その実体をあかるみにひきずりださなければならない。（8 月：163 頁）

ここで主人公兼語り手の「私」は、なかなか姿をみせない「白い顔」（米兵）にしびれを切らし、現れた場合を想定しては暴力的な憎悪を隠すことなく想像を膨らませ、さらに大東亜戦争の縮図であるところのフィリピン戦線における日本兵／比島兵／米兵の配置－関係を再確認していく。とりわけ、米兵に対する憎悪の感情は「私」一人のものでなく、こと投降兵としてようやく姿をみせた米兵に対する感情は、次に引く「四月九日。」に書かれたように、日本の「兵隊たち」にも共有されていた。

〔アメリカ兵が〕フイリツピン兵を指揮し、自分たちだけが安全地帯に立籠り、そこから放たれた砲弾が、多くの味方を奪つてゐるのだと云ふことを、あらためて想起するまでもない。そこには、二百か三百の姿しか見られなかったが、いまぬけぬけと白旗をかかげ、私たちの前にあらはれたと云ふ事実だけからもハツキリ理解出来るのである。最後列のアメリカ兵と、擦れちがつた瞬間に、全員がわれにかへつたやうである。然し誰もしばらくは喋りだすものはなかつた。大きな感激のあとにくる、自己をみつめるやうな沈黙が、激しい動揺の中にも訪れたのである。そして私たちは、間もなく目的地だと云ふことをも忘れ曾てない深いもの思ひの中にゐた。(8 月：176 頁)

こうして、アメリカ兵への集団的な憎悪は「無言」の「沈黙」へと抑圧され、次の一節へと至る。

このまま済ましてしまへるものであらうか。多くの味方の犠牲と、ながい間の労苦の回想が、それを激しく否定する。それならどうしたらよいか、うしろから射撃して、みなごろしにしてしまふか、それとも……いやすでにそれは出来ない。彼等がここまでやつてくるまでには、多くの日本兵にも会つてゐる筈だ。その日本兵が、おそらく歯ぎしりして見送つたであらうやうに、私たちもまたさうするよりほかに仕方がない。私たちは日本人である。いついかなる場合も日本人である。そして日本人であると云ふことを、その瞬間くらゐ尊く、美しく感じた記憶を、過去に私は持たない。それは何と切ない誇であつたらうか。(8 月：176 頁)

「私」も含めた日本兵は､「日本人」という「誇」によって米兵に対する殺意を必死に抑えこんでいく。同時に、抑えこまれた米兵への殺意は、日本兵－日本人の尊さ－美しさを幾重にも高めていく。

上田廣はこのほかにも、『緑の城　バタアン・コレヒドール戦話集』(新興亜社、昭 19) を上梓している。収録作のうちバターン半島総攻撃をモチーフとした「緑の城」には、「俘虜の取調」から判明した「敵の性格」として、対「フイリツピン兵」への非道な仕打ちを次のように指弾している。

敵〔アメリカ〕の対陣規律は、つねに後方にあるアメリカ兵の督励と、フイリツピン兵幹部の看視によつてまもられて居り、兵隊の多くには食物もわたらず、もちろん給料なども支給されず、疲労困憊の極に達してゐる。彼等〔フイリツピン兵〕は誰のために山にもぐり、誰のために戦つてゐるのか、真剣に考へださなければならないときだが、外界のいつさいから切りはなされてゐると云ふ事実が、その考慮を停止させてゐる。シンガポールの陥落も、蘭印軍の全面的降伏も、太平洋がいまやわれわれの手中にあると云つてよいことも、次の攻撃にそなへたわれわれの力も、彼等にはわかつてゐないのである。(34～35 頁)

ここでも上田は、「敵」であるアメリカが「フイリツピン兵」を欺し、情報を遮断することで思考を停止させ、対日本戦の前線へと駆りだしていることを指弾している。もちろん、これは同じ東洋人である「フイリツピン兵」をとりこみ、ともにアメリカの支配を打ち破ろうとする大東亜戦争のイデオロギーをなぞるものであり､大東亜共栄圏構想を進める帝国日本の植民地主義であることはいうまでもない。

2–3：柴田賢次郎「樹海」

柴田賢次郎がバターン半島総攻撃を書いた「樹海」(『樹海』櫻井書店、昭 18［図 2］) は、出来事からほぼ一年を経ての刊行となったが、この間にも、「バタアン戦記」(『現地報告』昭 17・6)、「敵前渡河（バタアン総攻撃)」(『中央公論』昭 17･8)､「火の花の島」(『時局雑誌』昭 17･9)､「バギオ紀行」(『三田文学』昭 18・1) などを陸続と発表していた。

以下、「兵隊の地図」､「地熱」の内容をふまえつつ、「樹海」本文を検討していく。

冒頭部は、次のように前線へ向かうメンバーの紹介となっている。

三月十三日、いよ〳〵戦線へ出発する日だ。軍報道班員として、バタアン前線の〇〇部隊に参加する為である。昨日は〇翼隊に参加する上田廣、田中佐一郎氏らが出発した。また明日は火野葦平、向井潤吉氏ら〇翼隊に従く組が出発する筈である。私達同行は写真班の豊島君、映画班の牛山君、画家の永井君の四人と、戦線指導の為に大塚准尉と田中軍曹以下兵が五名加はつて総勢十二名の編成であつた。(3 頁)

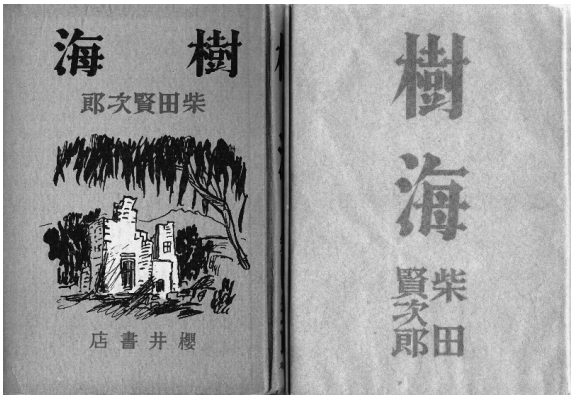

図 2：柴田賢次朗『樹海』 本体とカバー

ここには上田廣、火野葦平の名前もみられ、引用につづく場面には尾崎士郎が登場するなど、固有名を用いて事実らしさが強調されて幕が開く。つづいて注目されるのは、次のような南方風景である。

街道はマンゴウの並木で、椰子、パパイヤの樹林と黍畑ばかりだ。色とり〳〵のこぢんまりとした洋館が続くかと思ふと、腰の高い竹の柱に茅葺きのニツパ・ハウスが、点々と樹林の中に隠見される。花かと見まがういかだ葛が枝口の先に真赤な葉並を見せてとても美景である。山並はるかに遠くアラヤツト山がぽつねんとルソン平野におかれてあるばかりだ。バタアン山系は遥かに遠く樹林に遮られて見え難い。苅りとられた稲田に、黍畑に水牛が群をなして遊牧してゐる。あてもなくのたりのたりとさ迷つてゐる水牛の姿は、比島人の一つの欠点を表徴してゐるが如く如何にも淋しい状景である。エスコルターの繁華街附近に群をなして行く比島人の顔が浮んで来る。物欲しげな顔、努めずして与へられることのみに望をかけて生きて来た彼等のどこに独立があり繁栄があるであらう。(5 頁)

エキゾチックな現地風俗を書くうちに、今日からみれば問題含みの比島人認識が示されるが、その裏にはこれまでフィリピンを支配してきた西班牙－米国への批判も潜在している。また、フィリピンの日本軍に宣伝班が好意的に迎えられた様相も、次のように書かれる。

「君達は、この山の中の第一線部隊へ、何の為に、どういふ覚悟で来てくれたのか」
軍命令で、吾々がこの兵団附を命ぜられた申告をすますと、兵団長は厳かにこう言つて質問された。私は四人を代表して、報道の任務と、対敵宣伝並に報道資料の蒐集の為、この兵団の将兵と生死を共にして前進する旨を答へた。すると、兵団長は「ご苦労」と優しく笑つてから／「兵隊も喜ぶだらう。何も新聞や雑誌に出してもらふことを期待したり、その為に闘つてゐる訳ではないが、諸君が一緒に前進してくれるといふだけで嬉しいものなのだ。それに対敵宣伝は一番大切なことである。日本軍は比島軍と戦つてゐるのではない。彼等も一部の者をのぞいては、日本軍と戦ふ戦意などないのだ。彼等を暴虐な米軍陣地より救出する為にも是非この宣伝は必要なのだから……」(20～21 頁)

こうした宣伝班の活動中に「私」が目にしたのは、米兵による次のような言動である。

一人の敵兵が、壕から出て来た、両手をあげて投降を示してゐる。私たちのゐるところから二、三十米の近くである。一人の下士官が、銃を擬しつゝ近づいて行つた。比島兵でなく、米兵である。

伊禮少尉が、怒鳴つて行つたのはこれであるらしい、と思つて眺めた瞬間、その米兵は、近づいた下士官めがけて拳銃を撃つた。安心して近づいて行つた下士官は、一撃で倒された。「あつ」と私たちが叫んだ時、行きぎ(ママ)過てゐた伊禮少尉ら三人がふり返つた。二人の兵といつしよに飛びこんで行く少尉に、その米兵は、また高々と手をあげて投降を示したのだ。何といふ態度であらうか。私は、憤激の激情を圧へ得なかつた。(113〜114 頁)

「私たち」の眼前で展開されたこの出来事を前に、「私」は「何といふ態度であらうか」と「憤激」を隠せずにいる[11]。他人の命を軽んじつつ、自己保身に余念のない米兵の振る舞いは、米国－米兵を日本が正すべき「敵」として固定させ、そのことは内地で「樹海」を読む読者－日本国民にも伝達される。

他方、日本兵に対して「私」は限りない信頼感を、次のように示していく。

戦場の慣はしない(ママ)のであらうか、兵隊には誰彼の差別なく、戦友が、日本人が、わけもなくなつかしいのだ。さうだ、私にも、どの兵隊も一様になつかしくてたまらない。(98 頁)

こうした「兵隊」－日本人への「なつかし」さは、次に引く「樹海」結末部でさらに増幅される。

兵団司令部の入口で、私はトラツクから呼び止められた。荷物集積所の菅野主計少尉である。／「柴田さん。元気でしたか。ご苦労」／私は黙つて頭を下げた。皆んなこうして労はつてくれる。涙が出そうだ。／「これ食つて下さい。今日の日に、大切に持つてゐたんです」／と、言つて放りなげてくれたのは大きな饅頭だつた。大塚准尉、永井君、牛山君、豊島君と分けて、私はその饅頭にかぶりついた。内地のであらうか、こちらでこしらへたのであらうか。否そんなことはどつちだっていゝのだ。私は只訳もなく貧り食つてゐた。食つてゐて涙がぽろ〳〵とこぼれる。これでいゝのだらうか、山へ入つてから兵隊の世話になるばかりだつた。兵隊さんの好意ばかりを、平気にうけて来た。それでいゝのであらうかと、私は亦泣きながら残りの饅頭を食べる。そうだ。私は、この兵隊さんの姿を、ありのまゝに書かう。書いて銃後の人々に伝へる義務があるのだ。正直に書かうと決心するのであつた。(133 頁)

ここで柴田と呼ばれる「私」は、日本兵の「姿」に改めて感動し、フィリピン戦をめぐるさまざまな要素のうち、「この兵隊さんの姿」を従軍作家である自分が書くべき主題と位置づけ、「書いて銃後の人々に伝へる義務がある」と確認している。つまり、「私」はフィリピンでの体験を書くことへとブリッジする動機も日本兵から贈与されたというのだ。こうした柴田の日本兵に対する尊敬の念は、『少国民大東亜戦記　美しき兵隊』(成徳書院、昭 18)に付した「はしがき」においても、次のように書かれる。

大東亜戦争が勃発すると、私は陸軍報道班員として南方派遣を命ぜられ、一年間フイリッピン作戦に従軍して帰つてきた。／帰つてきて私の頭に浮ぶことは、戦場といふところは、何といふ美しいところだらう、と思ふ気持である。戦場ではなくて兵隊の美しさが、戦線をかくも美しく見せるのかも知れない。泥にまみれ、破れた軍服を着て戦つてゐる兵隊が、なんでそんなに美しく見えるのであらうか。それは精神の美しさである。／私は、今度の戦線で多くの若い将兵を沢山見てきた。決心を聞き、行動を眺めてきた。その将兵がいちやうに言ふことは、自分たちは、この大東亜戦争をする為に生れてきたのだ。この戦争を勝ちぬくために生きてきたのだ、といふことであつた。さうして身を以て実践してゐる。(1 頁)

そのことにくわえて、同書同文で柴田は、次のようにこの戦争の意味づけも忘れない。

大東亜戦争は昭和十六年十二月八日に始まつたのであるが、日本は世界人類の敵である米英と戦

ふべしと、ずつと以前から運命づけられてゐたやうに思はれる。五十年、百年前のことはさておいて、十二年前の満洲事変が起つた頃から、日本は米英を滅ぼさなければならない使命を負はされてゐた。満洲事変が起きたのも、支那事変が起きたのも、みな米英のためであつた。ドイツとイタリヤが欧洲で立つたのも米英の圧迫にたへかねたからである。(2 頁)

こうして、眼前の個々の日本兵に対する感情は大東亜戦争のイデオロギーと結びつけられた上で、銃後の読者(少国民)へと届けられていく。こうした媒介もまた、戦時下における文学者の役割であった。

以上、前稿で検討した火野葦平「兵隊の地図」にくわえ、本稿で検討した火野葦平「東岸部隊」、上田廣「地熱」、柴田賢次郎「樹海」を通覧すると、バタアン半島総攻撃をモチーフとした戦記の特徴は以下の五点にまとめることができる。第一に、いずれの戦記においても前線における宣伝班の活動が詳細に記述され、フィリピンの風俗、戦場の様相、比島兵・米兵等が文化人の立場から書かれた。第二に、命がけの対敵宣伝の様相が、比島兵の協力やその成果としての敵兵の投降まで含めて書かれる。第三に、欺すようにして比島兵に戦わせて自らは姿を隠す米兵(の言動)の卑劣さが、強調される。そのことと対照されるように第四として、宣伝班員の眼からみた日本兵の立派さも、改めて強調されていく。以上を総じて、第五として宣伝班員として活動する文学者の存在意義も、戦記によって実践的に示された。

3. 文化工作の裏側

太平洋戦争が進行中だった昭和 17 年、その全貌がみえない中で始まった宣伝班の活動は、戦後になると戦争の帰結はもとより、さまざまな事情が明らかになったことで、その語りにも変化がみられる。火野葦平は、目次に《将軍本間雅晴刑死についての批判には今後なほ多くの歳月を与へねばなるまい。今日は唯、真相とは云はぬ、一個人の、自分の眼で見、心で信ずる事実を提供するにとどめよう》と紹介された「バタアン死の行進」(『文学界』昭 27・9)を発表する。同作の一節を次に引く。

開戦以来、バタアン半島の中には、何十万枚のビラが撒布されたであらうか。さうして、飛行機によつてばらまかれたそれらの紙の弾丸が、どれだけの成果を得たであらうか。宣伝といふものが近代戦の大切な要素となつてゐることを認めるに、吝かではないけれども、私たちは自分が直接に関与したこのバタアン作戦では、そのことにすこぶる疑問をいだかずには居られなかつた。(106 頁)

こうした疑問は、戦後、南方徴用でフィリピンに行った多くの文化人が言表していくが、太平洋戦争当時は、現地における戦後文化工作も含め、その成果ばかりが頻りに語られていた。その一例として、木村毅「比島作戦と民族意識」(『報道写真』昭 17・7)を次に引く。

今度の戦争が始つた時、或る比島青年は、今度こそ日本が勝つてくれなければ、東洋民族は永久に救はれる時はないだらうといふことを痛感し、早く日本軍が来て米軍を追払つて呉れゝばいゝと思つてゐたが、やがて日本軍の爆撃機がやつて来て、反日新聞の建物をものゝ見事に爆撃し、周囲の建物には何の損害も与へなかつた、その的確な爆撃ぶりを見て、これなら必ず日本が勝つと安心したといふ。私がマニラで馬車に乗つて出掛けた時、丁度米兵の捕虜がぞろ〳〵とやつて来るのに会つたが、馭者までがそれをみて『こんな嬉しいことはありません、今までさん〳〵威張り散らしてゐたアメリカ兵の、あのざまを見てやつて下さい』といつて喜んでゐた。実際米兵捕虜のだらしなさには私も呆れたが、彼等は比島兵を第一線に立て、自分達は後方で督戦ばかりしてゐたから、いざ降参して見ると米兵だからといつて威張つて居られない、それどころか比島兵の復讐を恐れてビク〳〵もので、進んで比島兵の荷物まで持つてやるといふ始末だ、これをフイリツピン人が見た時、そして、それが日本の実力によつて現はされた変化であることを自覚した時、彼等の日本に対する感謝と信頼は、如何ばかり深まつたことであらう。(54 頁)

ここで木村は、比島青年をして、日本への信頼と米国への敵意を本音のように語らせていく。しかも、一比島青年が日本を頼りつつ米国を排すという構図は、そのままフィリピン戦、さらには大東亜戦争のイデオロギーを体現しつつ、それを縮図として示した寓話でもあり、そのように書かれている。

フィリピンでの戦後文化工作については、たとえば橋本関雪・吉川英治・火野葦平・今日出海・石坂洋次郎・武田麟太郎・田中佐一郎・向井潤吉・猪熊弦一郎・鈴木栄三郎「文化人のみた比島　現地座談会（下）」（『朝日新聞』昭 17・8・27 夕）でも議論され、その際、吉川英治に次の発言がある。

> 世界の枢軸としての日本を深く考へる時南方は要するに日本の一手、一足である、その一手一足のために日本がその本質として昔からもつてゐる深い高い文化を捨てるといふやうなことがあつてはならない、日本がほんとに高い文化を持つてをるといふことが認識され、信頼されるならば彼らは積極的にそれを知りつかまうとするのではあるまいか、さういふ意欲のもとに日本文化が開かれ、見られるやうになれば日本の固有の文化といふものも調子を落さずに彼らに理解されるのではあるまいか〔。〕

これをうけた今日出海は《さうだ、南方の文化工作といふのも結局そこへ行くまでの苦労だね》と応じ、さらに《結局のところ比島独自のものを作り出して行く――それに日本的なものを加味して行くといふこと、その日本的なものを何処に加味して行くかといへば彼らに最も欠けてゐる団体的協同的訓練を与へるといふ点にある――かう思ふ》と述べた。この発言に対しては、吉川が《大きく世界的にいつていろんな文化的部門においてこの世紀を代表する新しいものがまだ生れてゐないのだね》と、石坂洋次郎が《さうだ、それをわが日本人が主体となつてこゝをもふくめて一緒になつて作り上げて行くことが我々の使命だ》（1 面）と、誰もが大東亜共栄圏を疑わずに日本の文化的指導を謳っていた[12]。

ただし、軍隊組織に入って以降の宣伝班の活動は当初から困難だったようである。しかも、この点には戦時期から不満がもらされていた。西山少佐・今日出海・尾崎士郎・向井潤吉・池田照勝「比島攻略従軍記“東洋の凱歌”をめぐる座談会」（『文化映画』昭 16・4）[13] では、尾崎に次の発言がある。

> 宣伝班は軍隊のなかにある。つまり宣伝部隊です。自分勝手な行動はできない。軍律のなかで行動してゐるから……。そこで一貫性といふことに形ができた。これはいままでなかつたものが、今度の大東亜戦争で急速にできた部隊ですから、軍隊のなかで、どういふ位置をとつて、どういふ関連の下に仕事をするかといふことが、明確に決定することは、ほんたうはできなかつた。それは已むを得ない。〔略〕だからこれは実験台として将来の大宣伝班を作る基礎的な意味において大きな試練であつたと思ふのです。（頁表記なし）

これが、尾崎一人に限られた戸惑いでなかったことは、徴用時代を振り返る火野葦平が、戦後一〇年を経た後、当時、尾崎との間に次のやりとりがあったことを明かしている。

> 第二陣を報道部の庭に迎へたとき、尾崎さんが私にむかつて、君たちが来るのを待つてゐたんだよ、どうも変てこな具合でね、といつた。そのとき、私は意味がよくわからなかつたが、時日が経つうちに尾崎さんの言葉が理解されて来た。それは徴用文士と軍人との間がしつくりしない、話があはないし、仕事もできない、第一、文士の身分があやふやなので困る問題ばかり起る、といふやうなことを含みのある言葉で述べたものであつた。ドイツの PK 部隊（宣伝中隊）をまねたやうなものらしかつたが、思ひつきの急製のうへに、軍人の頭がピントはづれで、実際、私もへこたれてしまつた。そして、軍人と喧嘩ばかりして一年ほどが経つたのだが、当時は軍人が大ゐばりだから、喧嘩といつたところで大ぴらにはできない。自然に不満や抵抗が陰にこもつて、みんな勝手な行動をとるやうになつてしまつた。[14]

本稿でとりあげてきた作品の「序」や「跋」では、軍人が文学者の働きを一様に称賛していたが、実際には立場－慣習の違いから、軍人と文学者の関係は難しかったようである。軍当局もこうした不和の存在を把握していたことが、火野の従軍手帖からわかる。「四月三日」の記述に、次の一節がある。

> ○降りがけに、小屋の前を通りかかると、呼びとめられた。大本営作戦課から来てゐる者だといふ人。話がききたいといふ。腰を下す。今度、大本営で、PK をやつてみたのだが、忌憚ない意見をききたいといふ。自分は中南支の報道部にゐた時分、その組織が計画的でなかつたためにまとまつた仕事のできにくなかつたきらひがあつた、馬淵大佐などとも、そのことを話したことがあつた、そこで今度の徴用にする宣伝班の結成は大いに賛成であつた。ただ、実際の運用上、ごたごたしてゐるが、これははじめなので仕方がないと思ふ、それから、前線に来て、いちばん感じたことは、作戦部隊が軍宣伝班といふものを全く理解してゐないことで、協力の上に不便このうへない、会ふ人々に一々説明しなくてはならない、対敵放送などやつても、迷惑がられることもある。さういふことをいつた。その人は、今度は急に思ひたつたので、全軍に徹底する間がなかつた、これはやはり歩兵操典とか要務令とか、きういふ典範のなかに宣伝中隊といふものを折りこまなければ徹底しない、といつた。そのほかいろいろな話をしたが、ていねいな、ものわかりのよい人のやうであつた。くらいので顔はわからない。[15]

本節で検討してきた一連の発言を、戦時期に公開された「地熱」や「樹海」をはじめとした戦記と比べてみるならば、軍宣伝班（の活動）についての実状が浮かびあがると同時に、戦時期の文学一般にも通じる難問が改めて見出される。つまり、戦時期に書かれた文学者による戦記とは、どの程度に忠実な報告であり、逆にどの程度にプロパガンダのために歪められているのか。少なくとも書かれた言葉通りに読めないこと[16]は、本稿の検証に明らかである。そうであれば、南方徴用作家たちは、どのような葛藤を抱えて、戦時期において文学作品や戦記を書いていたのか、問いは謎へと深化していく。より多くのテクストを対象としたていねいな検討を蓄積していくこと、さしあたりそれが当面の課題である。

（まつもと　かつや　所員　神奈川大学国際日本学部教授）

※本研究は JSPS 科研費 JP20K00323 の助成を受けたものです。

注

1　文学者の南方徴用について、神谷忠孝「南方徴用作家」（『人文科学論集』昭 59･2）、都築久義「作家の徴用」（『愛知淑徳大学論集』昭 61・3）、奥出健「徴用作家の戦争――ビルマ、マレー方面班を中心に――」（『近代文学研究』平 3・5）、木村一信・神谷忠孝編『南方徴用作家―戦争と文学―』（世界思想社、平 8）ほか参照。

2　中野聡「『第十四軍・軍宣伝班　宣伝工作史料集』第一巻　解説」（渡集団報道部編『第十四軍・軍宣伝班宣伝工作史料集　第一巻』龍渓書舎、平 8）、5 頁。

3　拙著『日中戦争開戦後の文学場　報告／芸術／戦場』神奈川大学出版会、平 30）参照。

4　この時期の文化工作（言説）については、拙論「太平洋戦争期の文化工作言説――南方・諸民族・大東亜共栄圏」（『人文研究』令 3・12）もあわせて参照。

5　南方徴用作家については、拙論「井伏鱒二『花の町』を読み直す――軍政下昭南市における「骨董」」（『世界文学』平 30･12）、「軍政下昭南市における文化工作（日本語教育）一面――陸軍報道班員･井伏鱒二「花の町」を手がかりに」（『立教大学日本文学』令 1・7）、「昭和一六年・文学者が書く蘭印――高見順『蘭印の印象』･『諸民族』」（『立教大学日本文学』令 2・12）、「帰還した南方徴用作家の内省――高見順「帰つての独白」」（『神奈川大学アジア・レビュー』令 3・3）、「南方徴用作家の自己成型――高見順「ノーカナのこと」」（『昭和文学研究』令 3･9）、拙論「帰還した南方徴用作家はどう読まれたか――尾崎士郎「朝暮兵」･

火野葦平「敵将軍」」（『文学と戦争　言説分析から考える昭和一〇年代の文学場』ひつじ書房、令 3）ほか参照。

6　吉田裕『日本軍兵士　アジア・太平洋戦争の現実』（中央公論新社、平 29）、14 頁。同書で吉田は、太平洋戦争を戦局に基づいて 4 期に分節しているが、第 1 期である《戦略的攻勢期》は、開戦～昭和 17 年 5 月までとされている。

7　テクストによってゆれはあるが、本稿の地の文では日本兵／比島兵／米兵と表記する。

8　拙論「バターン半島総攻撃における文化工作――火野葦平「兵隊の地図」を中心に」（泉水英計編『近代国家と植民地性　アジア太平洋地域の歴史的展開』御茶の水書房、令 4）。

9　石﨑等「火野葦平の〈戦争〉Ⅲ――中国戦線からフィリピン戦線へ――」（『立教大学日本文学』平 30・1）、68 頁。

10　拙論「太平洋戦争開戦後における文学者の使命－役割」（『太平洋戦争開戦後の文学場　思想戦／社会性／大東亜共栄圏』神奈川大学出版会、令 2）参照。

11　この出来事は、柴田賢次郎「敵陣地と米兵」（『少国民大東亜戦記　美しき兵隊』成徳書院、昭 18）にも書かれ、卑怯な米兵の言動が「これが米兵のほんたうの姿です」（95 頁）と強調されている。

12　大東亜文化（言説）については、拙論「昭和 10 年代における〈文化〉論：Ⅱ――日本文化／大東亜文化／世界文化」（『湘南フォーラム』令 2・3）参照。

13　本文では国立国会図書館の刊行表記に即したが、映画『東洋の凱歌』の公開は昭和 17 年であり、尾崎士郎のフィリピン滞在期間とも考えあわせると、雑誌の刊行は昭和 17 年だと思われる。

14　火野葦平「フィリッピン徴用――人さまざま――」（『文学界』昭 30・9）、102 頁。

15　鶴島正男「資料　葦平回廊 3　従軍手帖（比島二）」（『敍説』平 14・8）、165 頁。

16　拙論「昭和一〇年代文学を考え直すために――研究対象・問題領域・方法論」・「戦時下に文学の「非力」を語ること――高見順「文学非力説」」（『文学と戦争』前掲）参照。